

# 念仏往生因果同時

曾 我 量 深

## 一

『正信偈』を読みますと、「本願の名号は正定の業なり 至心信樂の願を因と為す 等覺を成り大涅槃を証する」とは 必至滅度の願の成就なり」とあります。『正信偈』は、始めに如来淨土の因を説き、それから、如来淨土の果を説くのでありますが、いまの本願名号の四条は衆生往生の因果を説いている。「本願名号正定業 至心信樂願為因」は、衆生往生の因としての行と信とを掲げたのであります。それから「成等覺証大涅槃 必至滅度願成就」は衆生往生の果、四十八願では第十一の願でございまして、必至滅度の願と親鸞聖人は願の名前を決定されております。しかし、その願事、願いの一つの事業といえますか、本願の、願い事は二つある。一つは等覺を成ず。等覺のもう一つ上に妙覺というものがあって、等覺・妙覺という、妙覺が仏さまのお覺りであります。等覺というのはそれより一段下の覺りでありまして、これは便ち弥勒に同じい、弥勒菩薩の位であります。もっとも、等覺というのは、詳しくいえば等正覺というのでございます。この等というのはひとしいというのでありまして、ひとしいというについては等と同じうのがあります。同と等を組み合わせると同等とすれば、同も等も一つだということになりますけれども、等に対しては同、同と等ということがあります。

仏教のサンスクリットの原典を中国に翻訳するにつきまして、諸君ご承知の通り、旧訳の時代と新訳の時代という

二つの時代があります。つまり、有名な玄奘三蔵という方は、自分より以前の翻訳は旧訳というもので、旧時代の翻訳であるといわれた。旧時代の三蔵法師というのは、多くは中国人でなくして西域、インドと中国の間にあるところに生れた人たちでございます。そういうので、中国の言葉並びに中国の思想は熟しておらない。それで、翻訳がことによると間違つて、人を誤まるといふことがある。こういうので玄奘三蔵は、自分の翻訳は正確なものであつて間違いないと、自ら新訳と称した。自分の翻訳は新訳である、新しい時代の翻訳であると名告りをあげておつた。それで、旧訳・新訳ということが分かれておるわけでありすけれども、しかし、わたくしどもの三部経というのは旧訳であります。『阿弥陀経』も『大無量寿経』もみな旧訳であります。『大無量寿経』でも新訳の『大無量寿経』もあるので、『無量寿如来会』と称する翻訳は新訳でございます。ずっと前、インドの方から支那の国に三部経が伝わり『大無量寿経』が伝わつてきた。前に伝わつたものでありますから、旧訳時代の翻訳というものがあつたのであります。だから、旧訳の經典が用いられておつたといふようなことでありまして、たとえ玄奘三蔵の新訳の經典ができましたでも、やはり旧訳の經典を用いておるといふようなことになっております。それで、法然上人でも親鸞聖人でも、まさしくは正依の經典として旧訳の經典を用いておりますけれども、十分でないと思うようなことがあれば新訳の經典を読んで、それを以て比較して訂正していくということが行なれておるのであります。特に『教行信証』は、法然上人のおぼしめしをよく伝えて、詳さに異訳經典、つまり、新訳を以て正依經典旧訳を照らしいくと、そういうように教えて下されてあるのであります。

それで、等覺を成じという等覺は、詳しくいえば等正覺ということであります。等正覺ということとは、旧訳經典では妙覺と同じ意味であります。この時の等というのは、等しいというのでありますからして、この場合は沢山の諸仏がおいでになつてもみな同等である、お覺りにおいて違いはないというので等正覺と申します。仏さまには十号、十種の尊号というものがある。『大無量寿経』を読んでいきますというと、法蔵菩薩のご師匠さまである世自在王如

来のみ名を挙げるところには、詳さに如来、応供、等正覚、明行足、乃至、仏、世尊というように如来の十の称号を挙げております。で、この時の第三番目にでているのが等正覚、等正覚は等覚ともいうのであります。旧訳では、等正覚とか等覚というのは如来の覚りのお徳を証明したものであると決めてある。ところが新訳の方では、等覚とか等正覚というのは如来のお覚りより一段下った位である。いわゆる因位菩薩の一番最上の位が、等覚とか等正覚というものである。こういふのと同じ等覚とか等正覚とかいいましても、それを以て如来の位をあらわすというのが旧訳、如来の位より一段下ったところをあらわすのが新訳であります。それで、『正信偈』が「等覚を成り大涅槃を証する」といふのは、新訳の『大宝積經』の『大無量壽經』の異訳である『如来会』によって、等覚を成ずるとおっしゃったのであります。それを正定聚の位といい、「正定聚に住すれば必ず滅度に至る」といふのが旧訳經典の言葉で、われわれが読んでおる『大無量壽經』にはそういうふうに表示してあるのでございます。だから等覚を成じということについては、正定聚というのも等正覚というのも同じことだと思えばいいのでございます。つまり、現生正定聚でありますならば、現生等正覚であるというべきなのであります。

## 二

現生に正定聚に住することについては、『大無量壽經』の「下巻」の始めに第十一願成就のご文というものが掲げられてあります。「下巻」を開くというと、先ず以て第十一願成就の文が「仏、阿難に告げたまわく、其れ衆生有りて彼の国に生るる者は皆悉く正定之聚に住す。所以は何んとなれば、彼の仏国の中には諸の邪聚及び不定聚無ければなり」とでている。この「生彼国者」は、従来、「彼の国に生るれば」と点をつけて読んでおった。「生彼国者」を「彼の国に生るれば」と読むのは、一般の人がそういうように読んでいたからで、浄土宗も、従って法然上人も一般の読み方にしたがうて「彼の国に生るれば」と読んでいた。者の字を生るればと読んでいたのを、親鸞聖人は者と

か人とかいうことにして「彼の国に生るる者は」とお読みになった。それで、「彼の国に生るる者は」という時になれば、いわゆる現在をあらわす。つまり、生るる者はと人をあらわすのであるから、過去に既に生れてしまったという意味ではなくて、現在に生るる者と人柄を挙げたのであります。こういうように、者の字を生るる人とか者とかいうように点をつけて、みな悉く正定之聚に住するということを、現生正定聚と親鸞聖人はご決定になった。それだけのことはみんないうておるのでありますけれども、「所以は何んとなれば」と、「所以は何んとなれば、彼の仏国の中には諸の邪聚及び不定聚無ければなり」と、それに続く第十一願成就の文を多くの人は読まない。けれども、「所以は何んとなれば」ということが大切なのでありましょう。それを読まなければ、ただ独断論に過ぎない。理由なしに、一方は未来だ一方は現在だというて、ただ親鸞聖人のご意見だというだけのことである。親鸞聖人は、従来の読み方全部を訂正せられまして、そうして、従来は生命終って浄土へ往生すると、往生は生命終ってするのであると、こういう具合にいつていたのについて、真実報土と方便化土とお分けになったのであります。

諸君ご承知の通り、横川の恵心僧都は『菩薩処胎経』を読んで、それを以て阿弥陀仏の浄土には報土と化土というものがあると『往生要集』の中に註されている。これは、諸君が『往生要集』を読めば一番いいのでありましょうけれども、近くは『高僧和讃』の源信僧都のところを読めば、一応わかることになっておるのであります。これが、親鸞聖人が報化二土を、つまり、真実報土と方便化土とを明晰にお分けになる依り所となっているのであります。それで、現生において正定聚に住しておる人のみが、真実報土へ往生するのであると決定し、それから現生において邪定不定の人は方便化土へ往生するのであるとお決めることになる。親鸞聖人はそうお決めるのだけれども、一般に浄土宗ではそういうことをいわないのであります。『往生要集』にはそう書いてあるけれども、法然上人は別に報化二土というものを分けてお教えになっていない。それは、善導大師の教えの中には、報化二土を分けるということが書いてない。だから、法然上人は主として善導大師に依っておいでになるものだから、たとい『往生要集』にそうあっても

それをお用いにならないで、報土化土ということをお分けにならないわけであります。要するに、阿弥陀仏の浄土はすべて報土である、化土ではなくて報土であるというのが善導大師のご決定であります。

それで、往生というものは、法然上人によれば大体未来往生であると決められております。浄土真宗の宗学におきましても、報土と化土を分けておるけれども、すべて往生は成仏と同じように未来であると、決められてるのであります。けれども、そう決めるのはどういうものであるかと思うのであります。結局、往生と成仏というのは、最後帰着する点からいえば一つであって、一致するのでありましようけれども、しかし、すべて往生と成仏とは一つだと決めてしまうと、生死の身を以ては成仏するわけにはいかないことになる。成仏は、金剛那羅延身といいますか、無生身といいますか、法性生身といいますか、そういう身を得て始めて仏の覺りを開くというものであって、生死の体、煩惱具足の身を以て無上涅槃の覺りを開くということは、全く不正直である。成仏はそうだけれども、往生は障りがない。往生は、煩惱具足の身を以ても往生できるわけであります。成仏はできない。だから、そういう点で往生と成仏とは、かりに体は一つだということでも、往生と成仏との意義とか意味とかいうことにおいては、はっきりと區別しているのが本当であろうと思うのであります。それは、曇鸞大師の『往生論註』、それから『往生論註』によってお作りになった、わが祖師聖人のご和讃を読めばよくわかる。そうすれば、曇鸞大師も親鸞聖人も、そのご領解は一つであるに違いない。そうすれば往生は、なにも生命終ってから往生するというわけじゃない。往生というのは、真実の信を獲る、即ち大菩提心を発することである。真実の信心は大菩提心、横超の大菩提心であると『教行信証』に教えて下されてあるわけであります。だから、この大菩提心、浄土の大菩提心は願作仏心をすすめる、その願作仏心は単なる願作仏心でなくして、如来の本願力廻向によって願作仏心を得たというわけであります。願作仏心を得たとするならば、その願作仏心は単なる自分だけの成仏に関するのではなくして、それは即ち度衆生心である。願作仏心は、即ち度衆生心である。だから、願作仏心というのは、単なる願作仏心ではなしに度衆生心であるというので

ありますから、願作仏心というのは成仏というわけにはいかないけれども、しかしながら「如来の廻向に帰入して願作仏心をうるひとは 自力の廻向すてはてて 利益有情はきはもなし」であります。

だから、願作仏心即ち度衆生心ということは、事実として現生において、つまり、未来ではありません、現生において願作仏心即ち度衆生心である。それ故に如来の廻向に帰入して願作仏心を得たというならば、願作仏心という名前は因の位でありますけれども、やはり、如来の果徳を因の姿にして、われらに廻向して下されたのであります。故に、願作仏心は聖道門という如き単なる自力の願作仏心とは違います。だからこの願作仏心は、願作仏心即ち度衆生心である。願作仏心に度衆生の一つの果徳といえますか、自分は成仏したというわけではないけれども、度衆生心というものがちゃんと成就している。願作仏心即ち度衆生心であるというところに、信心決定の人は如来と等しい。

如来と等しいということは、願作仏心が単なる願作仏心でなくて、願作仏心は即ち度衆生心である。だから自らは成仏しないけれども、自ら成仏せずしてしかも衆生を化益する、衆生を利することは自由自在である。「浄土の大菩提心は 願作仏心をすすめしむ すなはち願作仏心を 度衆生心となづけたり。度衆生心といふことは 弥陀智願の廻向なり」。「弥陀智願の廻向なり」と、特に悲願といわず智願というのは、阿弥陀の本願は仏智の不思議である、仏智の不思議を全うじて、諸仏無上の智慧を全うした本願であるということである。だから、如来の廻向に帰入して願作仏心を得る。それで、自力を以て願作仏心というものを起したというのとちがって、願作仏心を得たところなんです。これは、如来の廻向によって願作仏心を得たんであります。だから、それは単なる言葉通りの願作仏心ではない、即ち度衆生心というものをそこに成就しておる、仏心をそこに成就しているのである。

### 三

だから、「如来の廻向に帰入して 願作仏心をうるひとは 自力の廻向をすてはてて 利益有情はきはもなし」。例

えば親鸞聖人がご存命の時に、果してどれだけの利益有情をなされたのかわからない。ただ一人一人の利益有情はしなくとも、われらの称うる念仏は如来廻向の念仏であり、また「聞其名号信心歡喜乃至一念」と、第十七願の諸仏の伝統の教えを聞信して、仏恩報謝のために自ら称える念仏である。自ら称えられるお念仏は、そのまままた教えの歴史の中に摂められて教えを成就してくる。つまり教えを受けたものは、本当に教えを聞いて教えを信じて、一文不知のわれらが自然法爾に称える念仏、つまり仏恩報謝です。その自然法爾に称えるお念仏は、そのまま阿弥陀仏の本願の教えの歴史を作っていく。教えの歴史に作られて、そしてまた教えの歴史を作っていく。だから、われらが一人一人称えるお念仏は、第十八願の「乃至十念」の念仏でありましょう。その「乃至十念」の念仏は、われら衆生の称えたお念仏だから、これは称えたものだから、その衆生が往生成仏することは勿論でありましょう。勿論であります。ただその行者が往生し成仏するのみならず、それがそのまま第十七願の諸仏称名の願を成就してくる。諸仏称名の願の歴史的事実というものを成就して、いつまでもいつまでも本願の教えというものが滅亡しない。ただ教えが尊いから滅亡しないというのではなくて、その教えが尊いから、また衆生を教え衆生を育て衆生に信心を与え、そして信心からおのずから流れ出るところのお念仏が自利々他する。つまりそのお念仏がお念仏のおみのり、第十七願の諸仏称名の願を完成していくのであります。

そのことを明らかにするために、親鸞聖人が特に第十七願といわれる。第十七願あるが故に、われらは如来の本願の教えを聴聞し、また育てを受けて自分はお念仏を喜ぶような身に育ってきた、現生正定聚の位に住せしめていただくのであります。ただそれがそれにとどまらずして、そのご利益が自分一人にとどまらずして、教えを受けた人がそのまま善知識になる。自分は善知識だと、自分から名告りを挙げるというわけではありません。いわゆる無名の善知識と申しますか、善知識にも有名の善知識もありましょうが、有名の善知識は沢山いらっしゃるわけではない。けれども阿弥陀仏の本願のおみのりというものは、有名な善知識の力だけではなくして、無量無数の無名の善知識の力

になってきた。善知識は如来でありましょう。善知識は如来と等しい。如来と等しいから如来というてさしつかえないのであります。自分は善知識だ、自分は如来だというのは、聖道門ならばそういうてよいかも知らないけれども、われらのおみのりでは、そういうわけにいかないのです。けれども諸仏如来の尊い精神というものをいただいておれば、やはり諸仏如来と等しい大きな仕事をする事ができる。それで、「如来の廻向に帰入して 願作仏心をうる」とは 自力の廻向をすてはてて 利益有情はきはもなし」と仰せられるのであります。それは、聖人がなにも自分は偉いからこれだけの仕事ができるというのではないに、自分とはるに足らない無名の一人であるけれども、それが仏さまと同じ、釈迦牟尼如来と同じように利益有情きわもなき尊い仕事をさせていただく。みんなこう第十八願に帰入して、一声でも二声でも称えたお念仏が、全部第十七願を成就してくる。第十七願を成就して、阿弥陀仏の本願のおみのりは永遠に消滅することがない、と、いうことを教えてくださるのであります。『教行信証』の「化身土巻」の一番最後のところに、『安樂集』が引いてあります。前なる者は後なる者を導く、後なる者は前なる人を訪う、そうして、その次その次と後字の人から人へと伝わって、いつまでもいつまでも法が栄えていく、ということが書いてある。どうしてそういうことができるかというと、第十八願と第十七願があるからである。つまり第十八願は信で、第十七願は行であります。この第十七願と第十八願の二願というものは、選択本願の行信というものであると『教行信証』に教えてくださった。つまり、道綽禪師の仰せられる言葉というものが、どのような道理があつてできるのかということを『教行信証』において明らかにしてくださるわけでございます。

それで、「等覚を成り大涅槃を証することは 必至滅度の願の成就なり」、つまり等覚を成ずるが故に必ず滅度に至る。等覚と滅度との関係は必至という。必至は未来である、未来であるけれども現在の等覚とそれから未来の滅度とは、等正覚を成ずる故に必ず滅度に至る。それで、等覚を成ずるが故に必ず滅度に至るというように、故という字が加わっている。これは『大無量寿経』の第十一願には「国中の人天、定聚に住し必ず滅度に至らずんば」とあつて、故



にという字はありません。それを、「正定聚に住するが故に必ず滅度に至る」と、その住正定聚と必至滅度との関係をもう一つ明らかにするために、故にという字をつけた。正定聚に住するが故に必ず滅度に至る。『往生論註』の「下巻」の一番終りには、三願的証のご文というものがある。で、この願と力というものは、互いに矛盾撞着しないで相い助けるとあります。人間世界は、願と力というものが矛盾撞着しておるものである。人間世界は、悉く願と力が矛盾撞着して、願と力が互いに助け合いをして、両方を完成するということはないんでありましょう。

だから、そういう世界を『歎異抄』の中には「善惡のふたつ惣じててもて存知せざるなり」とこういうて、「そのゆへは、如來の御ころによしとおぼしめすほどにしりとをしたらばこそ、よきをしりたるにてもあらめ、如來のあしとおぼしめすほどにしりとおぼしめすほどにしりとをしたらばこそ、あしさをしりたるにてもあらめ」というている。このように、如來のみ善惡を知らしめすということは、いわゆる願と力が互いに相い助けるということでありましょう。われらの娑婆世界といいますが、物質主義に迷うているところのわれらの現在の世界の性格というものは、力のない時に願が働いている、力が成就すれば願は止むということになる。だから、願というものは力を得るまでの手段に過ぎない、力を得れば願は無用である、力を得れば、もう力だけしかなくて願がなくなる。こういうように、力と願とが互いに矛盾撞着して、すべて願が発展すれば、願は發展解消の状態に終っておるようであります。阿彌陀の本願は、本願が成就したからというて、本願が解消するわけではない。本願が成就すれば、それがそのまま更に新たに本願の意義、いよいよあつい信仰の意義を持つことになる。そのことを『往生論註』は、最後のところに述べておるのであります。この世の中の一般の人は、他利も利他も同じだと考える。他利と利他は同じだと考えるけれども、曇鸞大師はその言葉に左右があると着眼された。それで、「菩薩、是の如く五念門の行を修し自利々他し」と、自利他利といわないで自利々他と仰せられた。特に、利他と他利ということを区別された。それで、私は利他は如來の大慈大悲、他利は菩薩の中慈中悲であると思うのでございます。中慈中悲を他利、如來の大慈大悲を利他という。そういうので、一応われ

われの常識で考えれば、因位の本願を自利とし、果上の如来の不可思議力を利他とするのでありますが、因位の方は他利といい、果上の方は利他というと考えてみたらどうかと思えます。それで善いのか悪いのかはつきりしませんが、とにかく利他というのは阿弥陀如来の本願力のみであって、如来以外の菩薩とか二乗とかの慈悲は他利というものであって利他といわない。利他は大慈大悲であって、大慈大悲ということになれば利他ということになる。如来以外の人の利他は大慈大悲でないから、利他というてもやはり限界がある。如来の大慈大悲の利他には限界がない。だから、本願成就して阿弥陀如来とならせたまいたからというて、本願が解消したわけではないので、どこまでもどこまでも因位本願というものは尽くるところがないのであります。

それで、私は阿弥陀如来という仏さまは因果不二といいますが、因位と果上とが不二の仏である、因果不二のお覺りを持っておいでになるといいたいのでありますが、それも間違いであるのか正しいのかよくわかりません。とにかく阿弥陀如来は、前から見れば阿弥陀如来、後から見れば法蔵菩薩である。そういう意味において、私は阿弥陀如来と法蔵菩薩というのは、いつまでたっても不離不二の關係を持つておるものだと考えて、そう領解しているような状態であります。他の諸仏にも本願はあっても、その本願は大体成仏なさればみんな解消してしまう。阿弥陀如来に限って、本願成就して正覺を成就なされても、本願は解消しない。本願はいよいよ本願を念ずる力が強まり、そして尽きるところがない。これを如来の本願力という。だから如来の本願は徒らに設けるのではない、また力も虚しく設けるわけでもない。力が成就すれば、いよいよ本願が強くなる。こういう立場に立つて、曇鸞大師は『往生論註』の最後に三願の証をなされたわけであります。覺りは、阿弥陀の覺りも、諸仏の覺りもみな一応平等であるけれども、その本願とか本願力ということになると阿弥陀仏と諸仏とは大いに違うものである。そういうことを、善導大師は『往生礼讃』の中に明らかにしております。即ち、「然るに弥陀世尊深重の誓願を発し、光明名号を以て十方を摂化す。但し信心をして求念せしむ」と。善導大師は、『往生礼讃』の中に覺りは諸仏平等であるけれども、因位の本願はそ

の仏その仏によって違うし本願力も違うのであると教えられているのでありまして、われわれはそれを読んで領解すべきであると思います。

#### 四

それで、願作仏心ということの最終の目的は、必至滅度でありましょう。「等覺を成り大涅槃を証する」と、等覺を成ずることによって大涅槃を証する。この大涅槃という目的を出発点に置き換えてみれば、願作仏心というものではありません。親鸞聖人は、「願力不思議の信心は 大菩提心なりければ 天地にみてる惡鬼神 みなことごとくおそれるなり」と和讃される。『歎異抄』の第七条には、「念仏者は無碍の一道なり。そのいはれいかんとならば、信心の行者には、天神・地祇も敬伏し、魔界・外道も障碍することなし」とある。魔界外道も大いに恐れをいだいて、障碍しないのである、念仏は無碍の一道であるとお示しになっている。つまり、信心は大菩提心という、また大菩提心を金剛心ともいう。『觀無量壽經』には、金剛心ということが書いてあるわけですが、眞実信心は金剛心であると、金剛心であるが故にそれはまた菩提心であるという。その金剛心は、金剛無漏の体なりと、金剛無漏、無漏心を意味するものであると、善導大師は解釈しておいでのあります。金剛心は、金剛堅固の信心とか、或いは純粹無漏の信心というもので、われら凡夫の有漏の虚偽と違うものであると善導大師は解釈していられるのであります。それで、この金剛心は即ち菩提心であるというのは、曇鸞大師の『往生論註』の中に出ているお言葉であります。

それで、他力廻向の大信心は、金剛心というべきものである。金剛心は、淨土の大菩提心である。淨土の大菩提心は、専ら願作仏心をすすめて下さるのであって、その願作仏心がそのまま度衆生心であって、われわれは願作仏心の他にもう一つ度衆生心を発さねばならないのであります。それは『正像末和讃』に、「自力の廻向をすてはてて 利益有情はきはもなし」と解釈してあることによって知られるのである。そして、この他力の信心、

如来廻向の信心は大菩提心である。浄土の菩提心は、横超の大菩提心である。横超の大菩提心は、専ら願作仏心をすめるのである。ご承知の通り、聖道門は願作仏心と度衆生心と二つあるけれども、度衆生心を主にして聖道の菩提心が成立しておるのであります。自力聖道の菩提心は、自己の願作仏心というものを第二義にして、度衆生心が主なるものであります。その度衆生心のために、自分はどれだけ長い間地獄の苦しみを受けてもみな忍んでいく、度衆生の大事業のために自分一身がいつまでも地獄の苦しみを受けても少しも後悔しない。『大無量寿経』の「讚仏偈」の一番しまいに「仮令身止 諸苦毒中 我行精進 忍終不悔」というのは、そういうことを示すのであります。しかし、浄土の菩提心は、すべて如来の廻向に帰入しているから、度衆生心というようなことは全然ないものであって、専ら願作仏心をすめるものである。願作仏心だけをすめるものだから、大乘仏教の精神に背くというような非難をする人があるかも知れないけれども、それは度衆生心というものが他にあるわけではなく、如来の廻向に帰入して願作仏心を得れば、その願作仏心が即ち度衆生心であるということ、『正像末和讃』の「浄土の大菩提心は」以下三首続けてお示しになっているのであります。だから、先ず最初の目的であります願作仏心を出発点にして、他力の信心は願作仏心一つであると、その願作仏心が即ち度衆生心だと、そうしてそこに往生というものがある。だから、往生はただ自分だけ往生するものではありません。「普共諸衆生」普く諸の衆生と共に安樂国に生ぜんというのであります。信心が大菩提心であるが故に、現生において信心の生活、つまり信心の生活として往生という生活が、決定的に完成しているわけであります。信の一念ですぐその時に、生命終れば無上涅槃を得る。生きているうちは無上涅槃は未来だけでも、単に未来だというわけではないのであります。第一歩からして願作仏心を深く信ずるから、そこに決定往生の生活がある。往生は生活である。つまり、念仏往生といえますから、念仏は因位の行でありますし、往生は果であります。しかしながら、これは因果同時というもののなのであります。念仏称うところに往生の因果が成就するのであります。

(本稿は、昭和四十三年九月十九日大谷大学大学院における講義の筆録である。文責 松井憲一)